

1914年（大正3年）桜島噴火を描いた油絵資料とその修復

室谷 智子¹・武田 恵理²・中右恵理子²・古賀 路子²・高橋 志歩²

¹ 国立科学博物館理工学研究部 〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1

² 文化財保存修復スタジオ 〒179-0085 東京都練馬区早宮2-10-32

Oil Paintings Depicting the 1914 Sakurajima Eruption, and Their Restoration

Satoko MUROTANI^{*1}, Eri TAKEDA², Eriko NAKAU²,
Michiko KOGA² and Shiho TAKAHASHI²

¹ Department of Science and Engineering, National Museum of Nature and Science,
4-1-1 Amakubo, Tsukuba, Ibaraki 305-0005, Japan

² Painting Conservation Studio Takeda, 2-10-32 Hayamiya, Nerima-ku, Tokyo 179-0085, Japan

*e-mail: s-muro@kahaku.go.jp

Abstract The National Museum of Nature and Science possesses three oil paintings depicting the 1914 Sakurajima eruption. Nanto Omure and Kanehide Yamashita, disciples of Seiki Kuroda, an oil painter representing Japan, drew these oil paintings. Fusakichi Omori, professor of seismology in the Imperial University of Tokyo commissioned one of these paintings. The state of the Sakurajima immediately after the volcanic eruption painted with oil paints echoes the violence of volcanic smokes and thunders. These oil paintings hung originally in the Seismological Institute of the Imperial University of Tokyo. They became dirty or moldy over time, and deteriorated because they were in storage for years. To become worthy of admiration as works of art once again, we restored these oil paintings and reproduced their frames. For people who are not familiar with science, these oil paintings may become subjects of interest in a historical volcanic eruption as a work of art, rather than as an educational tool for science.

Key words: The 1914 Sakurajima eruption, oil painting, Nanto Omure, Kanehide Yamashita, Restoration of oil painting

1. はじめに

国立科学博物館（以下、科博）に所蔵されている数多くの地震に関する資料の中には、観測機器や観測データ、絵図、被害写真、書籍類、調査ノートなど様々なものがあり、それらの一部は東京帝国大学地震学教室（以下、地震学教室）に由来するものである¹⁾。その中に1914年（大正3年）に起きた桜島噴火の様子を描いた3枚の油絵が残されており（図1）、1971年に他の多くの地震資料とともに科博に移されたが¹⁾、その後最近まで資料庫内で梱包されたままになっていた。油絵の制

作には、当時を代表する地震学者である大森房吉が関わっていたことが推測される。2枚は大牟礼南塘、もう1枚は山下兼秀によって描かれたものであり、桜島噴火の様子を生々しく描写するものとなっている。彼らはともに鹿児島県出身で、日本を代表する同じく鹿児島県出身の洋画家・黒田清輝の弟子であった。そのようなことから、当時の災害を知る理学資料として価値があるだけでなく、美術分野においても、鹿児島洋画壇の祖である大牟礼南塘、黄金期を作った山下兼秀によって描かれたこれらの絵は大変貴重である。おそらく当時の地震学教室の関係者は間近にしていたと思われるが、今日ではほぼ忘れられた存在となっていた。今回、展示や長期保存に耐えられるように

修復を行ったので、それらの作業の記録とともに3枚の油絵について紹介する。

2. 1914年桜島噴火と美術資料

1914年1月12日10時頃、鹿児島県の桜島で噴火活動が始まり、18時半頃にはマグニチュード7.1の地震も発生した。これらの噴火や地震によって、死者58名、負傷者112名、焼失家屋約2,140戸の被害を生じた²⁾。噴火後、東京帝国大学の地震学教授であった大森房吉が現地調査に赴いている³⁾。1914年桜島噴火に関しては、多くの被害写真⁴⁾や写生図などに加え、油絵も残っている。黒田清輝によって描かれた油絵が鹿児島市立美術館に6点⁵⁾、山下兼秀によって描かれた油絵が鹿児島市立美術館に1点⁵⁾、鹿児島県立博物館に5点⁶⁾、所蔵されている。黒田清輝は噴火の際、病気の父親を見舞うために鹿児島に帰省中で、山下兼秀や大牟礼南塘とともに何度か桜島周辺に視察に出かけており⁷⁾、目撃した噴火の様子をスケッチに残している。黒田は大森が桜島周辺を調査する際に同行するなど、両者の間には交流があった⁸⁾。大森は黒田からスケッチの版画6枚を譲り受けたようで、そのことを同じく地震学教室の助教授であった今村明恒に「すばらしい獲物があった」と話している⁹⁾。それを見聞きした今村はすぐに黒田のもとを訪ね、スケッチ版画を基に描き上げた油絵を譲り受けたが⁹⁾、のちに今村の遺族によって鹿児島市立美術館に寄贈された（前述の鹿児島市立美術館所蔵の6点である）。それらの画集も作られたようで、地震学教室で購入したものが科博に所蔵されている（図2）¹⁰⁾。鹿児島市立美術館と鹿児島県立博物館のデータベースには、大牟礼南塘による桜島噴火に関する油絵の登録は見当たらなかった。

3. 国立科学博物館所蔵の 1914年桜島噴火の油絵とその修復

科博が所蔵する桜島噴火の油絵のキャンバスには油絵具で、2枚には「NANTO OMURE. 1914」、残る1枚には「KANEHIDE YAMASHITA. 1914」とサインが書かれており、それぞれ大牟礼南塘、山下兼秀によって描かれたものであることが分かる。大牟礼南塘の1枚と山下兼秀に対して、科博所蔵資料となった当初に撮影したと思われる写真が

残っており、それを見ると額がついていたことに加え、大牟礼南塘の油絵には「Sakura-jima eruption 1914」、山下兼秀の油絵には「桜島の噴火光景 大正3年」とラベルが添えられていた（図3）。おそらく地震学教室では、この状態で掲げられていたものと思われる。科博に収蔵されたのちに額が外されラベルも散逸したようであるが、なぜそのようなことになったのかの経緯については不明である。科博の地震資料については整理・登録を行ってきたが¹¹⁾、桜島噴火の油絵についてはそこから漏れており、最近まで科博内での資料移動の際に梱包されたままで資料庫内に置かれていた。

3.1 大牟礼南塘による油絵

鹿児島洋画壇を築いた大牟礼南塘（1874–1935）は、東京美術学校西洋画科で黒田清輝のもとで学び、県立鹿児島二中で油絵を教えていた。大牟礼の筆による2枚の油絵のうち1枚（図1a、大牟礼南塘1とする）は、『大正三年櫻島大爆震記』¹²⁾に写真が掲載されており、「大森博士の依嘱に依り大牟礼南塘画伯の描ける爆発當時の櫻島 見よ、閃々たる電光、流星の如き噴石」と紹介されている（図4）。大森が調査のために桜島に到着したのは1月16日であったため、1月12日の噴火直後の桜島は見えていない。噴火時の電光が見たかったが、黒田が電光の様子を描いたスケッチが非常に参考になると当時の新聞にコメントが残っており¹³⁾、噴火直後の様子を描いてくれるよう黒田の弟子である大牟礼に依頼したのではないかと思われる。噴火時の写真はたくさん残されているが白黒であり、油絵具で描かれた噴火直後の様子は、噴煙や電光のすさまじさをまざまざと伝えている。また、逃げる人々の様子も描かれている。

この油絵は、日中の爆発の様子が描かれており、画面の3分の2程度が空の描写で、空、雲、遠景の山の絵具の厚みは、織目が見える程度の薄さで描かれている。画面上で色を重ねてぼかすような描写である一方で、雲の中の雷や人、川、草木は筆跡が立ち上がるほどの厚塗りで描かれている。右下には茶褐色の油絵具で、「NANTO OMURE. 1914」と書かれていた（図5a）。

保存状態としては、木枠と支持体（紙やキャンバスなどの絵の具を乗せる素材）に塵埃や虫の死骸などが付着し、裏面から見ると支持体には油性と思われる染みが点在していた。木枠裏には、割れや中棧の中央部が画面側に持ち上がるような反

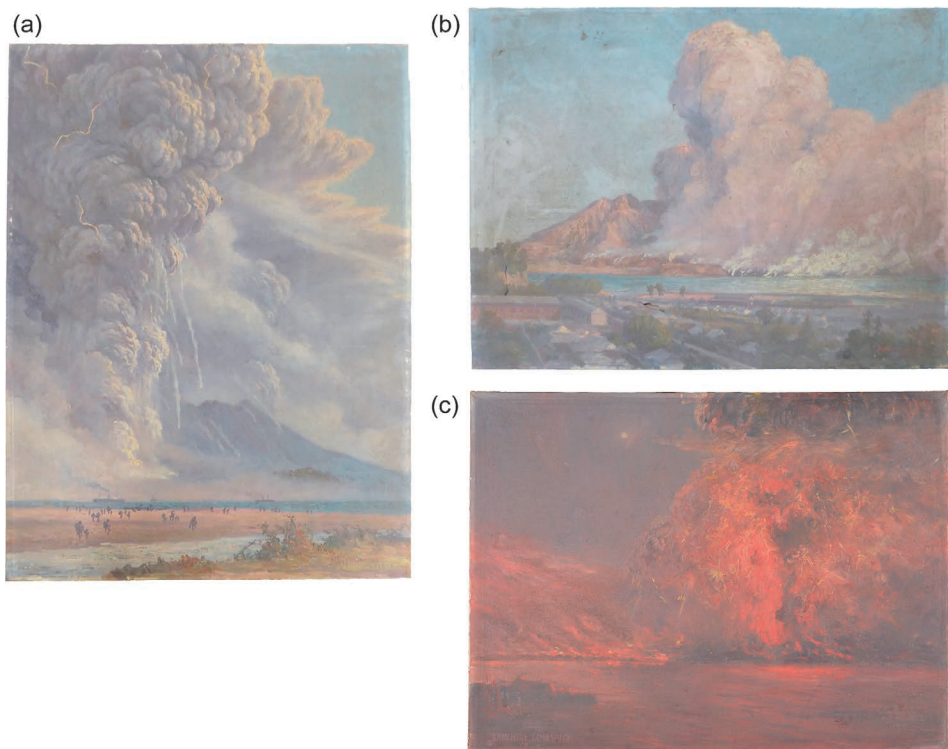


図1. 修復前の1914年桜島噴火を描いた油絵. (a)大牟礼南塘1（天地803mm×左右605mm），(b)大牟礼南塘2（天地605mm×左右804mm），(c)山下兼秀（天地611mm×左右807mm）.

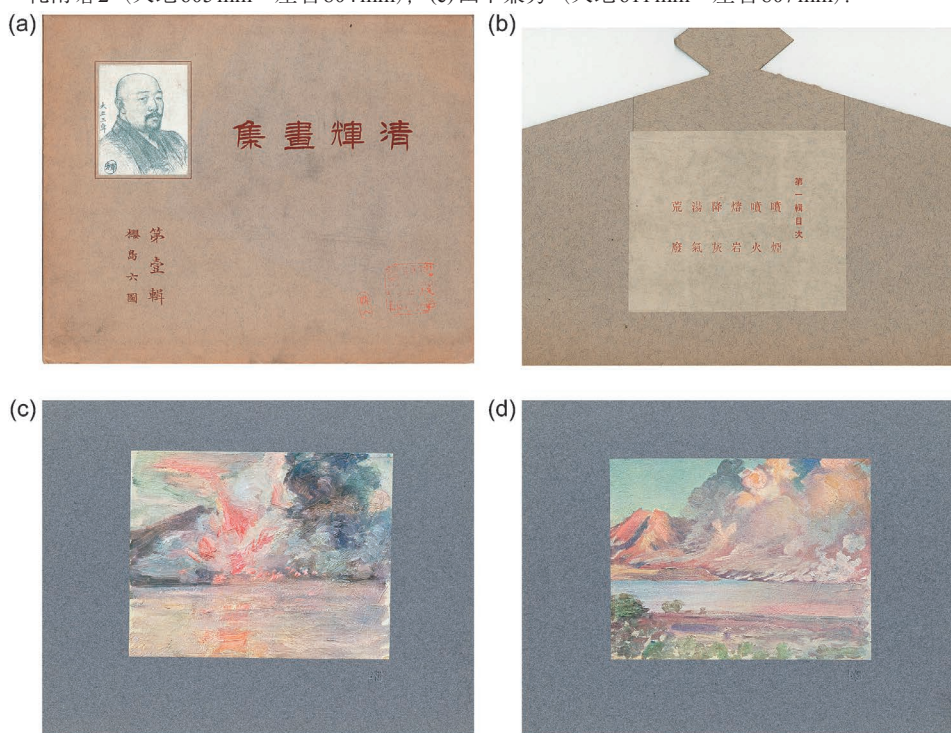


図2. 黒田清輝が描いた油絵6点「噴煙」,「噴火」,「溶岩」,「降灰」,「湯気」,「荒廃」の画集（台紙：縦236mm×横302mm，絵：縦140mm×横180mm）. (a)たとう式のケース，(b)目次，(c)「噴火」, (d)「溶岩」.



図3. 科博所蔵資料となった当初に撮影したと思われる大牟礼南塘1（左）と山下兼秀（右）の油絵の写真。額がついており、それぞれ「Sakura-jima eruption 1914」, 「桜島の噴火光景 大正3年」とラベルが付いていた。

りが見られた。画布周辺部には糸のほつれが見られ、また、地塗り層は四隅に剥落が見られた。絵具層は塵埃による汚損があり、カビと思われる黒色～茶褐色の2-3mm大の斑点が、画面上部を中心に点在していた（図6a, b）。画面周縁部10mmの帯状の範囲には、額に入っていたために生じたとみられる中央より明度が高い部分があり、さらに額が当たっていたことによる剥落が複数見られた。厚塗りした部分の絵具には経年亀裂が見られた。

この状態からの修復のため、以下の作業を行った。

- (1) カビの調査：修復前にまずはカビ検査として、顕微鏡による観察や培養試験、過ヨウ素酸シッフ染色（PAS染色）¹⁴⁾を行った。
- (2) 欠損部や亀裂周辺の絵具層強化：最小限のウサギ膠水溶液を細筆で含侵させ、電気こてで加温・加圧して接着、強化した（図6c）。
- (3) 洗浄：乾いた刷毛と粉消しゴムにて表面の塵埃を除去した（図6d）。その後絵具各色に耐溶剤テストを行い、絵具層への影響が最も少ない純水を綿棒につけ、ローリングさせて洗浄した（図6e）。画布裏面は、ケミカルスポンジと掃除機を用いて清掃した（図6f）。
- (4) 殺菌：画面、裏面それぞれを数回ずつアルコールで殺菌した。
- (5) 張り代補強：張り代にホットメルト型のシー



図4. 『大正三年桜島大爆震記』に掲載されていた大牟礼南塘の油絵の写真。

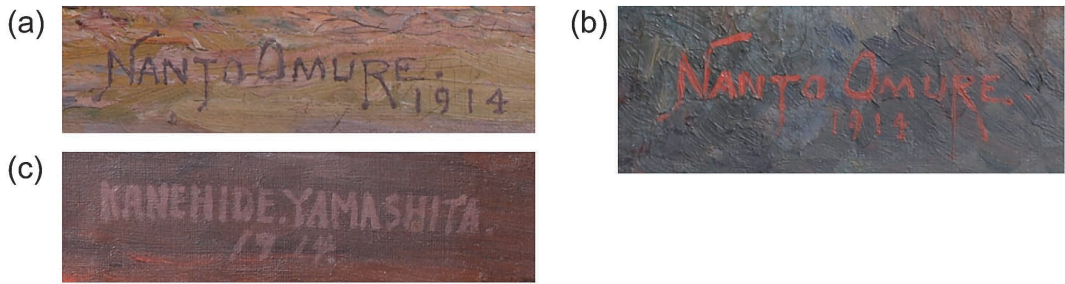


図5. 画布に書かれていたサイン。(a)大牟礼南塘1。(b)大牟礼南塘2。(c)山下兼秀。

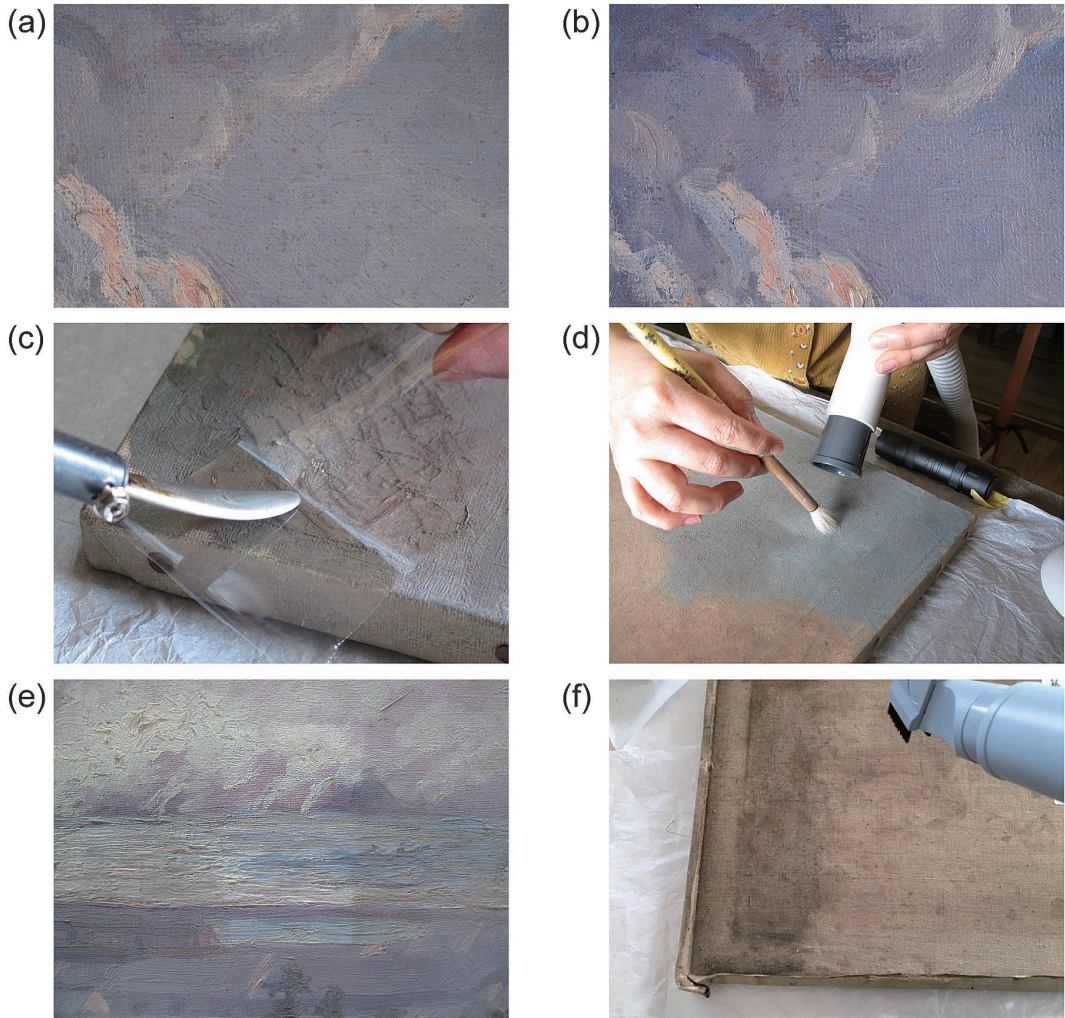


図6. (a)修復前の黒い斑点と(b)その修復後。(c)電気こてで浮き上がりを抑える。(d)ドライクリーニングによる粉塵の除去。(e)ウェットクリーニング。中央の色の明るい部分が洗浄した部分。(f)裏面の清掃。(g)張り代補強と張り込み。(h)充填整形。(i)画布の破れ、塵埃と(j)その修復後。(k)山下兼秀の修復前の裏面（白黒円形状のカビがある）と(l)修復後の裏面。山下兼秀の名前と作品説明が書かれている。(m)裏面の釘と厚紙の除去。(n)修復前の斑点。黄色円内の灰白の斑点は降灰ではなく、カビであった。(a)–(b), (h)は大牟礼南塘1, (c)–(g), (i)–(j)は大牟礼南塘2, (k)–(n)は山下兼秀の作品である。

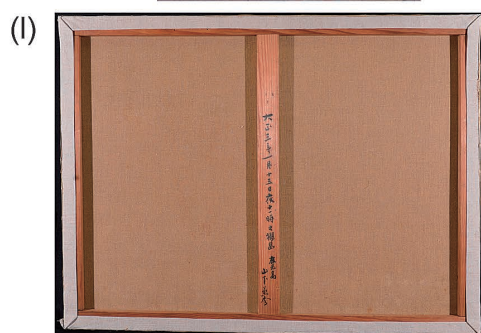
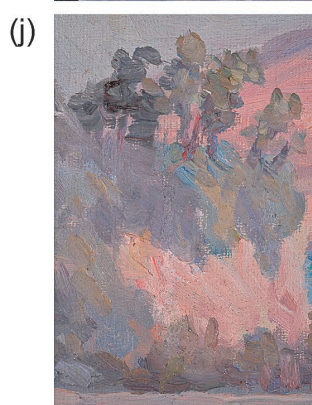
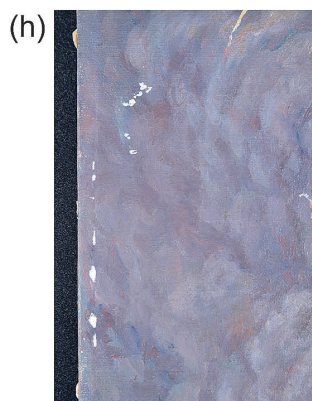


図6 (続き)



図7. 額装した修復後の油絵. (a)大牟礼南塘1（キャンバス：天地805mm×左右611mm，額付：天地930mm×左右734mm），(b)大牟礼南塘2（キャンバス：天地605mm×左右804mm，額付：天地735mm×左右936mm），(c)山下兼秀（キャンバス：天地611mm×左右805mm，額付：天地741mm×左右937mm）.

ト状接着剤を用い，新しい麻布を取り付けた（図6g）.

- (6) 張り込み：張り代を補強した支持体を，ステンレス釘を用いて張り器でテンションを調整しつつ，元の木枠に張り込んだ（図6g）.
- (7) 充填整形：額当たりなどの絵具の剥落や変形箇所に，石膏とウサギ膠で作った充填剤を充填した後，周辺の絵具層の変形に合わせてメスで整形した（図6h）.
- (8) 補彩：下層に水彩絵具，上層に溶剤型アクリ

ル樹脂絵具を用いて，充填部分に補彩した.

- (9) ワニス塗布：画面保護と光沢むら解消のため，ケトン樹脂によるワニスをスプレー塗布した.

以上により，修復前のサイズは天地803mm×左右605mm×厚さ20mmであったが，修復後は天地805mm×左右611mm×厚さ21mmとなった. 顕微鏡や培養試験ではカビは確認されなかったが，PAS染色では菌体が確認された. 過去にカビの発生があったが，現在は死滅していると思われる.

る。今回、作品保護と鑑賞用のため、紫外線をカットし、映り込みの少ないオブティウムミュージアムアクリルとともに、図3に近いイメージの額を装着した(図7a)。また、新たに作成した黄袋と中性紙箱によって保管することとした。

もう1枚(図1b、大牟礼南塘2とする)については、大森房吉によって依頼されたかどうかの経緯やタイトルは今のところ不明であるが、大牟礼南塘1の作品とともに大森のもとに渡ったと思われる。

この油絵は、日中の噴煙の様子が全体的に淡い色で描かれており、画面の3分の2が空と噴煙の描写で、空の水色以外は筆触が目立つ塗り方である。山や噴煙の影の部分は紫色で薄塗りされており、明部は白を多く混ぜてより筆の凹凸が目立っている。画面右側の陸と海の境界付近には白色で湯気と思われるものが描かれており、水面に反射した噴煙や湯気の白色とともに、厚塗りで筆跡が目立つ。樹木の葉も筆跡を生かして描かれている。右下には朱色の油絵具で、「NANTO OMURE. 1914」と書かれていた(図5b)。構図は黒田清輝が1月18日に浄光明寺から見た様子を描いた「溶岩」(図2d)によく似ており¹⁵⁾、一緒に出掛けた際のスケッチを基に描いたものと思われる¹⁶⁾。

保存状態としては、木枠に塵埃の付着が見られ、額に装着していた時の釘による固定痕が凹み傷の状態で四辺に確認できた。中棧の側面には虫の食害が見られ、支持体には木枠が当たって変形が生じ、特に画面左上の変形が顕著であった。画面左下方に長さ5cmほどの破れが2カ所(図6i, j)、左上に画面側から当たってできた凹みと突き傷が3カ所、さらに右上にも凹みが生じていた。支持体の右上には虫の巣があり、裏面には白っぽいカビの付着が見られた。地塗り層は額の装着時に釘が当たってできた剥落や、木枠の角にわずかな剥落、画面端の木枠の角にあたってできた亀裂があった。画面の下方部分には白っぽいカビが多く発生しており、右下のサインの近くの樹木を描いた部分には亀裂や浮き上がり、剥落が見られた。また右辺の端から1cm幅に額にあたって生じたような凹み、絵具の付着、黒っぽい筋状の付着物があった。左辺にも額を装着していたことによる汚損の少ない帯状の部分が見られた。

この状態からの修復のため、大牟礼南塘1の(1)~(6)と同様の作業のあと(図6c, d, e, f, g)、以下を行った。

- (7) 補彩：溶剤型アクリル樹脂絵具で補彩した。
- (8) ワニス塗布：画面保護と光沢むら解消のため、ケトン樹脂によるワニスをスプレー塗布した。

以上により、修復前、修復後ともにサイズは天地605mm×左右804mm×厚さ18mmとなった。顕微鏡や培養試験ではカビは確認されなかったが、PAS染色では菌体を確認された。過去にカビの発生があったが、現在は死滅していると思われる。作品保護と鑑賞用のため、大牟礼南塘1と同じオブティウムミュージアムアクリルと額を装着し(図7b)、黄袋と中性紙箱によって保管することとした。

3.2 山下兼秀による油絵

山下兼秀(1882-1939)は東京美術学校西洋画科に入学後、黒田清輝の後継者として期待されていたが鹿児島に戻り、鹿児島洋画壇の中心的存在として黄金期を作った。山下は噴火後に黒田とともに桜島周辺でスケッチをしており⁷⁾、多くの油絵等を残している。科博に残っていた油絵(図1c)の裏面木枠の中棧に、「大正三年一月十三日夜十一時之櫻島 鹿児島 山下兼秀」と墨で書かれており(図6k, l)、雷光らしきものが描かれ、爆発のすさまじさを伝えている。この絵についても、描かれた経緯は分かっていないが、大牟礼南塘の2枚の油絵と一緒に大森房吉のもとにあったと思われる。

この油絵の木枠は、中棧の幅が広く、画布が張り込まれている面の木枠の内側には傾斜がない。市販されている木枠は中棧よりも親木の方が幅は広く、木枠の画布側の面の内側になだらかな傾斜をつけて画布に当たらない工夫がされていることが多いため、本作品の木枠は建具師が作成したと推測される。木枠の周囲には鉄製の釘が打ち込まれているが、釘頭には厚紙の紙片が挟まっており(図6m)、過去に厚紙が打ち付けられていた時期があったと思われる。地塗り層は油性でとろみのある滑らかな白色塗料が、織目がやや見える厚みで均質に塗布されていた。絵具層の厚みや筆触は中程度で、背景は平滑、噴火部分は筆のタッチを利用して描かれており、やや厚めの部分には光沢が見られた。左下には褐色の油絵具で「KANEHIDE YAMASHITA. 1914」と書かれていた(図5c)。

保存状態としては、木枠には塵埃の付着が見られ、支持体裏面には下辺から18cmの幅で白黒円

形状のカビの斑点が集中していた（図6k, l）。左上に張りじわが、張り代には所々破れが見られた。画面左中部分に画面側からの押し痕、左下隅に木枠と支持体との間に挟まった異物に押されたことで生じた変形が見られた。地塗り層はもともと白色だったと思われるが、経年劣化で淡灰茶褐色に変色していた。絵具層は塵埃による汚損が著しく、カビと思われる2-3mmの斑点が多量に散在していた（図6n）。額に入っていた際に隠れていた周縁部分は、それ以外の部分より明度が高かった。

修復のため、大牟礼南塘2と同様の作業を行った。修復前のサイズは天地611mm×左右807mm×厚さ22mmであったが、修復後は天地611mm×左右805mm×厚さ21mmとなった。表面では、顕微鏡や培養試験ではカビは確認されなかったが、PAS染色では菌体が確認された。過去にカビの発生があったが、現在は死滅していると思われる。修復前に表面に見られた小さい灰白色の斑点は、降灰を表した彩色によるものかカビによるものか判断が難しかったが（図6nの黄色円）、通常光、紫外線、顕微鏡によって観察したところ、斑点部分が艶消しになっていること、描いた斑点であれば筆跡が残るはずだが見当たらないこと、輪郭が滲んでいること、斑点には中央に塊状の芯がみられることが明らかになり、カビの特徴と一致した。裏面では、顕微鏡検査と培養試験によりススカビの菌体が確認された。作品保護と鑑賞用のため、オブティウムミュージアムアクリルと額を装着し（図7c）、黄袋と中性紙箱によって保管することとした。

4. おわりに

鹿児島出身の洋画家、大牟礼南塘と山下兼秀の作品である1914年桜島噴火の様子を描いた油絵が3枚科博に残されており、調査と修復を行った。大牟礼南塘の作品のひとつが、東京帝国大学の地震学者、大森房吉の依頼によって描かれたものであることが分かり、残る2枚の作品も一緒に大森房吉のもとに渡り、地震学教室に残ってきたものと思われる。科博の所蔵になって以降、少なくとも最近40年間は展示をされずに資料庫に置かれたままであったため、長期にわたる湿気や水が流れ落ちたことなどによるカビ、埃、経年劣化や外部からの衝撃等によりキャンバスや木枠の傷みが見られた。今回の修復により色彩が鮮やかに甦

り、十分美術作品としても観賞に耐えられるようになった。今後は研究資料以外にも、美術館での展示等に活用されることが期待される。なお、修復・額装前の大牟礼南塘1と修復・額装後の山下兼秀の油絵を、科博の企画展「標本づくりの技（ワザ）―職人たちが支える科博―」（期間：2018/9/4-2018/11/25）にて展示した。

大牟礼南塘2と山下兼秀の2作品については、描かれた詳細な経緯は分かっていないため、引き続き、調査を行う必要がある。

謝 辞

3枚の油絵の修復には、国立科学博物館のコレクション構築費による支援を受けました。カビ検査は、NPO法人カビ相談センターによって行われました。また、査読者からは大変有益なご意見をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献および注

- 1) 室谷智子・有賀暢迪・若林文高・大迫正弘, 2016. 国立科学博物館に残る1889年（明治22年）明治熊本地震の資料。国立科学博物館研究報告E類, 39: 89-96.
- 2) 国立天文台編, 2019. 理科年表「日本の活火山に関する噴火記録」。丸善出版, p.715.
- 3) F. Omori, 1914. The Sakura-jima eruptions and earthquakes. I. Bull. Earthq. Invest. Commun., 8: 1-34 with Plates I-VII.
- 4) 科博には大森房吉が撮影したと思われる写真が残っており、国立科学博物館地震資料室（http://www.kahaku.go.jp/research/db/science_engineering/namazu/index.html）で公開している。
- 5) かごしまデジタルミュージアム（<http://kagoshima.digital-museum.jp/>）にて「黒田清輝 桜島 噴火」で検索したところ、「噴煙」、「噴火」、「溶岩」、「降灰」、「湯気」、「荒廃」の6点、「山下兼秀」で検索したところ、「桜島爆発図」の1点が該当した（最終検索日2019年9月22日）。
- 6) 鹿児島県立博物館収蔵資料データベース（http://jmapps.ne.jp/kagoshima_pref_museum/）にて「山下兼秀」で検索したところ、「美工214 山下兼秀筆溶岩の流出風景」、「美工215 山下兼秀筆爆発当時の桜島」、「美工216 山下兼秀筆鍋山の噴火」、「001 山下兼秀（館長室）」、「002 山下兼秀（4階会議室）」の5点が該当した（最終検索日2019年9月22日）。

- 7) 『黒田清輝日記』(中央公論美術出版, 全四巻)の1914(大正3)年1月15日と23日の日記に, 「一月十五日 木 晴 (鹿児島旅行記) 山下兼秀君等ト磯沿岸ヲ視察ス 途中伊集院公使ニ遇」, 「一月二十三日 金 晴 (鹿児島旅行記) 再ビ桜島へ赴ク 同行十一名ナリ 此連中福茶ト云フ旗亭ニ於テ晚餐会ヲ催ス 十時使ニ接シ出席 午前一時ニ至レリ 桜島同行者 堺 國友 五島 山下 岩山 大牟禮 梅北 杉本 外ニ有盈及敏子」とある。この日記は, 東京文化財研究所によって, デジタル公開されている (https://www.tobunken.go.jp/materials/kuroda_diary)。
- 8) 『黒田清輝日記』(中央公論美術出版, 全四巻)の1914(大正3)年1月16日の日記に, 「一月十六日 金 晴 (鹿児島旅行記) 午後水雷艇鴉ニ便乗谷口知事 大森博士等ト桜島西北東方面ヲ巡視ス 司令官吉田清風氏ハ筭町邸隣地ニ居住ノ由ナリ」とある。
- 9) 内田孝蔵・諸岡存・大多和興四郎・飯島博編, 1935. 大正三年桜島噴火探検二十五週年追憶記. pp. 42+25図。
- 10) 『清輝画集 第壹輯 桜島六圖』. 台紙に実物と同じサイズに印刷された絵を貼り, 6枚1セットになっている。大正三年四月十日に東京市神田区の中西屋書店から発行されている。ケースに「地震学教室図書之印」, 「購入」と朱印が押されている。
- 11) 大迫正弘, 2014. 国立科学博物館の地震資料. 地震ジャーナル, 57: 14-21.
- 12) 鹿児島新聞記者編, 1914. 大正三年櫻島大爆震記. 桜島大爆震記編纂事務所, pp. 340+付録pp.18+28図。
- 13) 1月20日発行の大阪毎日新聞に, 「爆発当時の電光は最も見たかりしも機会に遭遇する能はざりしは残念なりき, 幸い黒田清輝画伯が当時に来て居りて之を写生せるスケッチあるが何より好参考品なり…」と紹介されている。
- 14) NPO法人カビ相談センター試験報告書によると, カビ, 酵母, 放射菌等の細胞壁は多糖類で構成されており, 菌体があれば, 染色によって特異的にカビ酵母が桃紫色に陽性染色される。
- 15) 『清輝画集』の「溶岩」には, 「浄光明寺ヨリ見タル」, 「(一月十八日)」と説明が付いている。
- 16) 『黒田清輝日記』(中央公論美術出版, 全四巻)の1914(大正3)年1月18日の日記に, 「一月十八日 晴 (鹿児島旅行記) 有盈子 敏子ト加裘ハヲ連レテ南林寺へ墓参 夫レヨリ浄光明寺ニ到大牟禮子会合 今夜ヨリ配電ス 之レガ為市街稍復旧ノ状ヲ呈スルニ至レリ」とあり, 18日に黒田と大牟礼は共に浄光明寺にいたことが分かる。